

社会科教室 135号

平成7年度

社会科教育研究のあゆみ

香川県小学校教育研究会社会部会
香川県社会科教育研究会

目 次

会長あいさつ	1
定例研究会一覧	2
6 月定例会	3
7 月定例会	5
9 月定例会	7
10月定例会	9
11月定例会	11
夏季研修会	13
坂社研・東部小提案	15
香社研提案	25

共に生きる社会の構築を目指して

香川県小学校教育研究会社会部会
香川県社会科学教育研究会
会長 曾根 照 正

1 激動の1年から学ぶ

昨年は、1月17日に阪神・淡路大震災が起こり、3月にはオウム真理教事件が発生した。また、銀行の相次ぐ倒産、沖縄における米軍少女暴行事件等々まさに国内的にも国際的にも激動の1年だった。このような出来事をとおして自然災害の中での人間の無力さとボランティア活動等を含めた人間の生き方、国際社会の中での日本の在り方等々学ぶことが多かった。21世紀に向けて、日本は世界はどうあればよいかが厳しく問われたように思う。これまでの社会や自然を見る眼だけでは、複雑化する世の中をたくましく生きていけない状況となってきた。社会や自然を見る新たな視点が必要になってきたのである。

また、目を学校現場に転じて見ると、いじめ問題が多発し、一昨年に続いて自殺者が出るという憂慮すべき問題が発生し、学校教育の在り方そのものが問われてきている。

2 人間の生き方を中核にした社会科学学習の構築

今年も定例研究会が7会場で実施された。また、夏の社会科研究集会が坂出の東部小学校で実施された。どの郡市も教育の流れや時代の変化を敏感にキャッチし、「意欲を持って主体的に取り組む社会科学学習」「個に応じた論証の過程の追求」「よさを生かす支援を中心とした社会科学学習」等々のテーマが設定され、意欲的に実践が行われてきた。

坂出の夏の研究集会では、変化の激しい社会の中で、どんな知識構造を児童に定着させればよいかということで「共生」の考えを新たに提案し、議論の渦を巻き起こした。これからの社会の中で生きる力としての「共生」の視点が、「自然と人間」「人間と人間」「国家と国家」を見ていくときに大切にしなければならない視点であることが提案された。

このことは、授業の中で「児童と児童」のよい関係を築いていくうえからも、また、いじめや登校拒否をなくするうえからも大切にしなければならないテーマである。

平成10年度は香川県において、全国小学校社会科研究協議会（全小社）の全国大会並びに四国四県持ち回りの全国社会科教育研究大会（香川大会）を同時に重ねて引き受けることになっている。今年の研究を足場にして、さらに研究を重ねていきたいと考えている。皆さんのご協力をお願いしご挨拶にかえたい。

平成7年度 研究の歩み

- 6月定例会・・・坂出（東部小学校） 6月17日
 4年 「世界に広めようふるさと香川－わたしたちの県－」
 授業者 香川 和美（坂・東部小）
 提案者 吉田 和弘（坂・林田小）
 指導者 山田 知志先生
- 7月定例会・・・高松（新塩屋町小学校） 7月15日
 6年 「商人の活躍と町人文化の発展－高松の城下町から探る」
 授業者 大橋 けい子（高・新塩屋町小学校）
 提案者 喜多 文彦（高・花園小）
 指導者 植松 勝先生
- 7月31日 夏季研修会（坂・東部小）
- 9月定例会・・・仲善，丸亀（ニューキャッスル） 10月 7日
 6年 「明治になってからの新しい世の中」
 提案者 高木 弘信（丸・城坤小），山野 正登（丸・城坤小）
 6年 「土農工商の世の中」
 提案者 山田 泰二（仲善・豊原小），森井 信一（仲善・四箇小）
 指導者 田尾 勝先生
- 10月定例会・・・木田，香川，綾歌（香南小学校） 10月21日
 6年 「明治になってからの新しい世の中－条約改正－」
 授業者 前田 宏之（香・香南小）
 提案者 中澤 宗治（香・香南小）
 提案者 中野 昇一（綾・富熊小）
 指導者 徳田 仁司先生
- 11月定例会・・・大川，小豆（附属高松小学校） 11月 2日
 6年 「世界の平和を守る」
 提案者 井上 泉（小・豊島小）
 6年 「日本と関係の深い人々の暮らし」
 提案者 白澤 一修（大・小田小）
 指導者 森 正彦先生
-
- 1月定例会・・・三豊 2月 3日
- 研究委員会 2月24日

6月定例研究集会（坂出集会）

1 日 時 平成7年6月17日（土） 14:00～

2 場 所 坂出市立東部小学校

3 研究授業

- (1) 単元名 4年 『世界に広めよう ふるさと香川 ーわたしたちの県ー』
- (2) 授業者 香川和美 先生
- (3) 提案者 吉田和弘 先生
- (4) 指導者 池内 博 先生 （高松短期大学教授）
山田知志 先生 （坂出市教育委員会指導主事）

4 提案および討議内容

(1) 提 案

テーマ

社会の変化に主体的に対応する力を育てる社会科学習

- ・ 単元「わたしたちの県」で各市町の特産物の学習を導入とした県の認識を図った。「坂出市と姉妹都市であるサウサリートのお客さんに香川県を紹介する」という意識で特産物やそれぞれの地域について調べるという単元を組んだ。
- ・ 社会の変化に対応し、学習者のよさを生かす教育を求めていくにあたり、「共生」という視点を取り入れて研究を進めている。

(2) 討議内容

- ・ 「特産物」と「地域の姿」の間をいきつもどりつしていく学習であったが、子どもの意識に連続性がないので、思考に無理があったのではないか。
- ・ 本時では「自然」や「歴史」などの視点に加えて「交通」の視点にも気付かせようとしたが、それぞれの視点ごとに子どもの意識は独立してしまっているようで、どのようにつながりをもたせていくかが問題である。

5 指 導

《山田知志 先生 （坂出市教育委員会指導主事）》

- ・ これからの社会科は「関わり」を大切にすべきである。これは、坂社研のいう「共生」でないか。「子どもたちの積極的な教材との関わり」「まとめなどの表現活動の中で子どもと子どもとの関わり」「教師と子どもとの関わり」「子どもと地域社会との関わり」など授業でいかに「関わり」を増やすかということが課題となる。
- ・ 「共生」ということから「未来思考」を行い、これからの街づくりというようなことを考えていくときに、「変化」という視点は大切。例えば、高速道路ができる前後でどうなっているのかという内容は重要。

- ・ 「共生」という概念の必要性を問うことが重要。「共生」は、内容でなく視点である。「環境学習」と「共生の視点での社会科学学習」とはどう違うのかとか、「これまでの社会科で大切にしてきた基礎的・基本的な内容が漏れてしまうようなことはないのか」というような研究をしてほしい。
- ・ 今日の授業では「共生」ということは出てこない。次に自然と人間との関係の実情を学ぶ学習が必要となる。例えば、坂出、高松、善通寺…などを取り上げてみると、その街の性格が見えてくる。そこに、自然と人間が常に調和しながら生きている様子が見えてくる。それが「共生」であるといえる。
- ・ 本時は「ぼくのグループでは大野原の…」ということが最初の段階での学習であったのに、「市や町ではどんなことを生かして…」という課題が後から出てきてしまったのは問題である。本時は分かり方の見直しをすることが学習の中心でなければならない。ひとりひとりの子どもの「分かる過程」、はじめと終わりの分かり方（考え方）の違いを明らかにしていこうとする研究が必要なのではないか。例えば、子どものノートを大切にすることでは、自己評価について、分かり方の過程ということでは、相互評価ということについての研究が大切なことである。
- ・ 本時の「操作」は、「類別思考」であったが、これには次の2つしかない。

① 概念となるものを与えておいて仲間分けをする

気 温				風				土 地		
カ ー ド										

② 概念となるものを発見するために仲間分けをする

複雑な要素の時には②は難しい。慣れておかないと②は、最後までいかないことが多い。

①でも「残ってしまったカード」から②の概念発見ができることもある。

- ・ 4年生では、それぞれのカードのつながりを見ぬく力を育てて、関係思考へと導くことが課題である。即ち「こういう土地のところではこういうことになっている。だから、同じようなところは、同じようになっているのだろう。」という理解ができなくてはいけない。
- ・ 同心円的な広がりをもていくのがこれまでの学習。国際化・情報化というときには、近所との関わりの中に国際化を入れるというように、同心円構造ではもう駄目だと思わなければならない。

7 月 定 例 会 （ 高 松 ）

1 日時 平成7年7月15日（土）14：00～

2 場所 高松市立新塩屋町小学校

3 研究授業

- (1) 单元名 「商人の活躍と町人文化の発展」－高松の城下町から探る－
- (2) 授業者 大橋けい子（高・新塩屋町小）
- (3) 提案者 喜多 文彦（高・花園小）
- (4) 指導者 植松 勝先生（香川県教育委員会義務教育課主任指導主事）

4 提案及び討議内容

<提案内容>

- ・中央史から地方史へ
- ・関係思考のあり方について
- ・知識構造の変容について
- ・教科統合について

<授業説明>

- ・ これまでの授業は、地方史（学習材）→中央史（典型材）であったが、今回は逆にした。中央史で分からなかったものについて観点をもって地方史で学習を深めていったのである。
- ・ 町人文化の具体を地方史で学ぶことによって、知識が深まり、それが生きて働く力となると考えた。
- ・ 文化は、江戸以前は権力、財力のある人が中心であったが、江戸以降は町人中心で身近なものとなった。今回の授業では、その文化に隠されている庶民の心情を取り上げたかった。

- ・ 個の学習が成立するためには環境の設定をはじめ、様々な教師の支援が必要である。個のよさ、スタイルに合わせた支援・援助が大切である。そのためには、表現物を見ることが大切となる。

<討議内容>

- ・ 相互交流の意味について。操作、交流は同一なのがいいのか、個によって違うと考えるのがいいのか。
- ・ 子どもが調べてくる資料と、教師が用意しておく資料との違いやつながりについてもっと考えたい。学び合いや意見の交流ということも大切ではないか。
- ・ 子どもたちの問題意識について。子どもの意識は、個別学習、交流、全体での学習という活動のどの形態を願っていたのだろうか。

5 指導

(1) 教材について

教材は、自分とつないで考えられるものでなくてはならない。従来の学習では、地方史→中央史ということだが、中央史→地方史という順序で、逆に学習を進めていくことで、より具体的になっていったのではないか。

(2) 表現物とカード操作について

表現物は個によるもので、自分の論をつくるものが望ましい。そして、カード操作（関係思考）をしていくことで、産業や文化のつながりに気づき、個の表現物の変容していくのである。その表現物の変容のなかで、思考の深まりや内容の高まりがある。

(3) 支援・援助について

一定の枠をつくっておき、子どもの考えの方向性を見守るという援助が必要だろう。何でも調べたらいいというものではない。環境設定ということは重要である。相互交流については、いろいろな場合（タイプ）がある。各都市で研究を進めてほしいが、基本的には、自他の良さを認め合う、意見をまなび合うよう支援すべきであろう。

9 月定例会（丸亀・仲善）報告

1 日 時 平成7年10月7日（土）14:00～

2 場 所 丸亀ニューキャッスル

3 研究提案及び協議

◎提 案 丸亀 高 木 弘 信 （城坤小）「条約改正」

山 野 正 登 （城坤小）

仲善 山 田 泰 二 （豊原小）「身分制度」

森 井 信 一 （四箇小）

◎司 会 片 井 功 （琴平小）

◎記 録 久 保 山 学 （城西小）

◎指 導 田 尾 勝 先 生 （仲多度出張所指導主事）

丸亀理論提案

表現活動を重視した社会的思考力の育成

- 社会的思考力とは・・・社会的事象の意味について考える能力
思考形態 関係思考（比較・類別・因果），条件思考
思考の質 直感的 or 論理的，一面的 or 多面的
- 社会的思考力を育成する授業
思考には表現物の操作が必要である。

丸亀実践提案

社会的思考力を育成するための効果的な表現活動や操作活動のあり方
児童の予想 → 調べ → カード操作による修正

短冊カードに用語を書く

関連性を考える（因果・類別）→操作（分類）

友だちからの情報提供や再操作（分類し直す）

関連性を線でつなぐ

それぞれの立場になって，用語や気持ちを書き加える

カードを黒板に貼る

なぜそう考えたのか

ここに個性が出る

仲・善理論提案

自ら学び，生きて働く力を育てる社会科学習

学んだ力

学ぶ力

学ぼうとする力

→

○ 関心・意欲・態度を育てる

○ 社会的思考力を育てる

○ 問いかける力を育てる

→

助言の工夫（方向付け・意欲

板書の工夫（構造的な板書）

仲・善実践提案 「身分制度」

慶安の御触書等の指導・・・憤り

本時，別段御触書を提示。→ だれに対して出したのか。→幕府は，なぜこれを出したのか
予想 一揆を起こさないように。

罪人をその身分にしたのだろう。

農民に不満がたまらないように（年貢の確実な供出をねらって）

「上見て暮らすな，下見て暮らせ」の意味を考える。

武士のぜいたくな暮らしに憧れずに，さらに低い身分の生活を見て我慢しなさい。

農民の不満をそらした → 「分裂支配」の強化を考えた

今日のめあてを振り返る。→ 許さない。憤り。

マイナスイメージを払拭するために、皮革産業技術の向上などに役立ったことをおさえる。

すると、科学的認識だけでなく、心情的に共感する子供が増えた。

歴史の必然性、歴史的な背景を探ることができるようになってきた。

《討議》

- カード操作 最低限徴兵令などの基本的なことがらを全員が理解できていなければ無理がある。どのようにおさえていったのか。
- 基本的な用語・事象については教師がおさえていった。事象の目的（なぜそれをしたのか、それをしなければならなかったのか）を中心におさえていった。
- 同和教育との関連で難しい調べになる。児童が板書をするのであればねらいに迫れるのではないか。同和教育の核心に迫った問いに対しては、どう対応していくのか。
- 自ら学ぶとは、意欲を持ち続けることが必要だ。板書を児童がすれば、学ぶ力が付くとは言いきれない。核心に迫る問いに対しては、授業だけでなく、休み時間、帰りの会など継続的に指導した。
- 「生きて働く力」・・・すっきりしている
「表現活動の重視」・・・思考の過程が表れる表現が大切だ
「社会的な思考力をどうすれば育てられるのか」という大きな問いに対してはオープンエンドでいいのではないか。
- 伸・善の授業の雰囲気に関心した。助言・板書がしっかりしている。具体的である。方法論的な定例会が多い。「明治維新をどうとらえるのか」といった内容論についても話し合いたい。
- 近代化を富国強兵においたが、いろいろな側面があるので、年表と見比べながら学習を進めていく必要がある。一方的な認識に陥らないように、類別して関係づける力が必要になってくる。
授業の前に知識の構造化を図る必要がある。そこから本時のねらいがはっきりしてくる。

《指導 田尾 勝先生》

- 地理・・・鳥瞰的な立場・虫瞰的な立場。歴史にもこのような認識・見方が必要ではないか
- 梶田先生「氷山論」
見える学力・・・「知識・理解」「技能」
見えない学力・・・「思考力・判断力」「関心・意欲・態度」
「思考力」は見えにくい→「表現」によって見えるようにした。
「関心・意欲・態度」「思考・判断」は、内発的である必要がある。
「思考力・判断力」を高めるためには、児童の側からの課題になっておく必要がある。課題が自分自身のものになっている必要がある。学習課題に着目して研究を進めてほしい。
〈学習課題づくり〉
 - ・教師自身の教材についての吟味が必要である。
 - 事象の背景 → ここで何を教えたのか 歴史事象を児童に追体験させたい。
- 〈カード操作〉
 - ・内なる学習 つないだ線によって児童の思考パターンができてくるのではないか。仕組み図の実践を積み重ねてほしい。それにより、思考のパターン化が図られてくる。
 - ・外なる学習 つぶやき
人権意識の育成につながる実践を積み重ねてほしい。

10月定例会（讃岐・綾歌）

1 日時 平成7年10月21日（土）14：00～

2 場所 香南町立香南小学校

3 研究授業

- （1）单元名 「明治になってからの新しい世の中」～条約改正～
- （2）授業者 前田 宏之（香・香南小）
- （3）提案者 中澤 宗治（香・香南小），中野 昇一（綾・富熊小）
- （4）指導者 徳田 仁司先生（高松市教育文化研究所主任研究員）

4 提案及び討議内容

<香川郡提案>

テーマ 自ら問いをもち、追究する子どもを求めて
ー子どものよさを見いだし、可能性を育む社会科学習ー

- ・ 歴史的事象をそれぞれの立場でとらえる
- ・ 学習ノートの活用
- ・ 中浜万次郎を取り上げ、視点を変えて歴史的事実をみていく

<綾歌郡提案>

テーマ 子どもが意欲をもって取り組む社会科学習
ー主体的な学習になるための単元の構成についてー

- ・ 明治を条約改正の歩みとしてとらえる

- ・ 多様な学習形態により、意欲化を図る

< 討議内容 >

- ・ 明治時代以降の戦争についての認識をもう一度見直す必要がある。
- ・ 政治だけでなく、文化の視点ともからめて今日の授業ができていたのではないか。
- ・ 明治という時代は一人の人物だけでとらえることは難しい。複数の人物でとか、人物と事象をからめてとか、年表を活用してとか工夫していくことが必要となってくる。
- ・ 思考力のついて。歴史の場合、因果の思考が中心だが、明治の場合、いくつかの要因の関係をみるという関係思考も働かしないと意味がとらえにくいのではないか。例えば、政治と産業との関係などである。

5 指導

(1) 討論会という方法について

主張点が明確なことで、学級経営がしっかりしておくことが大切である。また、個が生きる、自己存在感がもてる討論会（交流）になっているということも重要である。

(2) 問いについて

子どもの問いも大切だが、まずは教師が教材研究をし何を教えるのか明確にしておくことが大切である。そして、年表を活用したり、新聞づくりという表現をしたりして、問いが高まっていくと考えられる。

(3) 関連指導について

社会科の授業と他の教科（国語など）や総合学習との関連を図った指導が今後大切になってくるだろう。

(4) 内容研究について

明治の国づくりを考える時に何をポイントにするか。それは、地租改正ではないか。なぜなら、決まったお金（税）が国庫に入ることが明治の国づくりを支えたと考えられることができるからである。

11 月 定 例 会 (大 川 ・ 小 豆)

- 1 日 時 平成 7 年 11 月 18 日 (土) 14:00 ~
- 2 場 所 香川大学附属高松小学校
- 3 提案者 大川 白澤 一修 小豆 井上 泉
- 4 研究提案

大川提案

自ら課題を持ち、意欲的に追究する子供の育成
体験活動を取り入れ、相互に共感し、学び合う学習活動

[テーマについて]

- ・ 児童が主体的に学び進める学習を進めるためには、体験活動を通しての課題をもつ
→ 調べ学習 → 意見交流をしながら様々な表現活動 → 思考を明確にしていく。
- ・ 体験活動・表現活動・交流の場をいかに教師の支援・援助等で確立させるという観点で 4 つの研究内容を中心に追究

[実践]

5 年生「日本の水産業新時代」 自国文化理解

町内のスーパーマーケットにある広告の中で、捕獲される場所が明記されている海産物のチラシを利用して、白地図に書き込む。



児童は食材の面より国際性に気が付いた。

・ 表現

小田の漁港の未来を考えよう → 小田漁港未来計画を立てる → 誰かのためにという考え方で施設を考案したり、表現した。

6 年生「我が国とつながりが深い国を求めて」 他国文化理解及び相互文化理解
各国政府観光局より、パンフレットを取り寄せ、様々な国と出会わせる。



児童は世界の国々に興味関心をもった。

・ 表現

ガイドブックを作ろう → 外国人とのふれあい方法を表現させる → コミュニケーション能力の育成につながる。

(交流のあり方)

児童同士が自分の考え方をより明確にしたり、深めたりする手立てとして様々な交流

・ 国際理解教育を行う場合の配慮

- ① 負の国際性や偏見をもたさない ② 子どもの内面にせまる ③ 適切な教材・資料 ④ 教師自身の自己変革など ⑤ 生活に結び付いた学習 ⑥ 世界の中で生きている実感

小豆提案

児童の「問い」を育てる社会科学習

- ・ 問いを育てるために
 - ・ 教材研究・体験活動の重視・思考の過程を表現・交流のあり方・自己評価・教師の支援
- ・ 子どもたちの「問い」が発展していくパターン
 - ①たくさんの種類を調べて、総合的な傾向をつかむパターン（総合型）
 - ②観点を決めて考えるパターン（観点型）
 - ③一つの事象に注目して、それを深く追求していくパターン（追求型）

6年生「世界の平和を守るスポーツ交流」国際交流・世界平和・他国理解
長野オリンピックとユニバーシアードの役割

この単元の基礎基本の内容として、オリンピックなどのスポーツを通して国際交流を中心においていること・これらのスポーツが国際平和に貢献していること・相手国の生活やものの考え方を理解することなどを学習していく必要がある。

5 討議

- ・ 国際化を社会科でどう学ぶ→違いを認める、よさを認め理解し合う→人と人との共生
- ・ 物を与えるのではなく、自立を援助していくことが真の協力（ユニセフ）
地球に住む人間の生き方について考えていく必要がある。
- ・ 国際性に気づく→教師が何をおさえとらえさせるのかが具体的であった。
- ・ 国際化→事象がちがっていても、人間の生き方の理解にポイントがある。
- ・ 大川→課題選択
小豆→反応類型型 } 取り上げるものによって授業の型が変わる
- ・ タイプの知識構造→タイプの研究→個の研究

6 森先生の御指導

- ・ 大川、表現の重層化、小豆、オリンピックの意味の変化、子どもが具体的レベルでどのように変わっているのか。認識は目に見えにくいので教師が子どもの認識をつかむのは難しい。
- ・ 一人一人の子どもがどのように変わったということがもっと具体的にもつためにも教師の評価が大切
- ・ 問いは大切→体験・表現・交流を通して、問いは変化していく。子どもがもっている問いをどう引き出してあげるかが、大切な支援ではないか。また、問いが高まっているかどうかを見ていくことが大切。
- ・ 他の地域のよさを取り入れる。→自分の地域と比べる。
- ・ 国際化→人間の願い、気持ち、考えを深めることが大切。

古市副会長

- ・ 真の国際人を作る。→わたしたちの子どもに対する責務
- ・ 主体的、創造的な教育課程はどうあるべきか→授業をどう改善するかという視点で考えなければならない。
- ・ 新学力観→真の学力観へ
- ・ 授業改善の10のポイントについて

平成7年度 夏の社会科研究集会

本年度、香小研社会部会では、「問いと論証の調べ学習」のテーマのもと、思考操作の深化を図る学習を求めて、思考・表現、個別化・個性化、評価等という課題に取り組んでいます。

「個が生きる学習」とするために、学習材と典型材とを組み合わせた教材開発や自然的思考と論理的思考の組み合わせによる思考操作の重層化、思考と表現の一体化を図ることの研究を進めています。この夏の研究集会における授業研究、ならびに実践交流等を通して交流し、さらに研究を積み上げていきたいと願っています。

そこで、下記により、同志の研究交流をいたしたく、ご案内申し上げます。

記

- 1 日 時 平成7年7月31日（月） 8:45 ~ 16:20
- 2 会 場 坂出市立東部小学校
〒762 坂出市室町1丁目1-21（☎ 0877-46-0234）
- 3 研究主題 「問い」と「論証」の調べ学習
 － 思考操作の深化を図る学習を求めて－
- 4 講 師 文部省初等中等教育局小学校課教科調査官 北 俊夫 先生

 高 松 短 期 大 学 教 授 池内 博 先生
- 5 主 催 香川県小学校教育研究会社会部会
- 6 後 援 香川県教育委員会 坂出市教育委員会
 香川県小学校校長会 香川県小学校教育研究会

7月31日(月) (進行・・・鈴木教頭)

時刻	内 容																																				
8:30 8:45	受付 提案授業																																				
	<table><tr><th>学年</th><th>単元名、授業者</th><th>司会者</th><th>提案者</th><th>協 力 者</th><th>指 導 者</th></tr><tr><td>2</td><td>もてんすか あかきん 白川恵美子(東部小) 城金美知子(東部小)</td><td>渡辺 教代 (東部小)</td><td>横田 美恵 (東部小) 藤本 洋子 (東部小)</td><td>福井 令子(東部小) 高橋ひとみ(東部小) 秋山みどり(東部小)</td><td>久米千鶴子 (坂・教育研究所事務局長)</td></tr><tr><td>3</td><td>ずいぶん変わったね、飯沼市東部の町は 藤原 洋子(東部小)</td><td>田井 敏之 (西庄小)</td><td>田中 秀年 (西部小)</td><td>山本香代子(金山小) 入江 純子(林田小) 金岡 太郎(岩黒小)</td><td>山崎 敏和 (香川県教委主任指導主事)</td></tr><tr><td>4</td><td>世界に広めようふるさと香川 吉光 愛(東部小)</td><td>吉田 和弘 (林田小)</td><td>福家 寿夫 (櫃石小)</td><td>寺嶋 俊秀(中央小) 香川 和美(東部小)</td><td>山田 知志 (坂出市教委指導主事)</td></tr><tr><td>5</td><td>夢いっぱいほらかつく星の大地 地下 浩文(東部小)</td><td>野村 亮子 (瀬居小)</td><td>岡本 敏英 (松山小)</td><td>高尾久美子(西部小) 大野 史子(東部小) 蔵本 勝広(与島小)</td><td>高橋 英式 (高・古高松小教頭)</td></tr><tr><td>6</td><td>守ろう地球の平和と環境 東原 繁臣(東部小)</td><td>金井 宏諾 (松山小)</td><td>大西 浩史 (中央小)</td><td>丸尾 浩一(加茂小) 小林久美子(岩黒小)</td><td>岡根 淳二 (香川県教委主任指導主事)</td></tr></table>	学年	単元名、授業者	司会者	提案者	協 力 者	指 導 者	2	もてんすか あかきん 白川恵美子(東部小) 城金美知子(東部小)	渡辺 教代 (東部小)	横田 美恵 (東部小) 藤本 洋子 (東部小)	福井 令子(東部小) 高橋ひとみ(東部小) 秋山みどり(東部小)	久米千鶴子 (坂・教育研究所事務局長)	3	ずいぶん変わったね、飯沼市東部の町は 藤原 洋子(東部小)	田井 敏之 (西庄小)	田中 秀年 (西部小)	山本香代子(金山小) 入江 純子(林田小) 金岡 太郎(岩黒小)	山崎 敏和 (香川県教委主任指導主事)	4	世界に広めようふるさと香川 吉光 愛(東部小)	吉田 和弘 (林田小)	福家 寿夫 (櫃石小)	寺嶋 俊秀(中央小) 香川 和美(東部小)	山田 知志 (坂出市教委指導主事)	5	夢いっぱいほらかつく星の大地 地下 浩文(東部小)	野村 亮子 (瀬居小)	岡本 敏英 (松山小)	高尾久美子(西部小) 大野 史子(東部小) 蔵本 勝広(与島小)	高橋 英式 (高・古高松小教頭)	6	守ろう地球の平和と環境 東原 繁臣(東部小)	金井 宏諾 (松山小)	大西 浩史 (中央小)	丸尾 浩一(加茂小) 小林久美子(岩黒小)	岡根 淳二 (香川県教委主任指導主事)
学年	単元名、授業者	司会者	提案者	協 力 者	指 導 者																																
2	もてんすか あかきん 白川恵美子(東部小) 城金美知子(東部小)	渡辺 教代 (東部小)	横田 美恵 (東部小) 藤本 洋子 (東部小)	福井 令子(東部小) 高橋ひとみ(東部小) 秋山みどり(東部小)	久米千鶴子 (坂・教育研究所事務局長)																																
3	ずいぶん変わったね、飯沼市東部の町は 藤原 洋子(東部小)	田井 敏之 (西庄小)	田中 秀年 (西部小)	山本香代子(金山小) 入江 純子(林田小) 金岡 太郎(岩黒小)	山崎 敏和 (香川県教委主任指導主事)																																
4	世界に広めようふるさと香川 吉光 愛(東部小)	吉田 和弘 (林田小)	福家 寿夫 (櫃石小)	寺嶋 俊秀(中央小) 香川 和美(東部小)	山田 知志 (坂出市教委指導主事)																																
5	夢いっぱいほらかつく星の大地 地下 浩文(東部小)	野村 亮子 (瀬居小)	岡本 敏英 (松山小)	高尾久美子(西部小) 大野 史子(東部小) 蔵本 勝広(与島小)	高橋 英式 (高・古高松小教頭)																																
6	守ろう地球の平和と環境 東原 繁臣(東部小)	金井 宏諾 (松山小)	大西 浩史 (中央小)	丸尾 浩一(加茂小) 小林久美子(岩黒小)	岡根 淳二 (香川県教委主任指導主事)																																
9:40	分科会討議 *学年部会による授業についての討議																																				
10:40 10:50	休憩 分科会(実践交流)																																				
	<table><tr><th>学年</th><th>司会者</th><th>提 案 者</th><th>記録者</th><th>指 導 者</th></tr><tr><td>2</td><td>鴨井 俊徳 (木・田中小教頭)</td><td>長谷 民子 山路 晃代 (香・浅野小) (三・仁尾小)</td><td>三好 啓治 (小・大坪小)</td><td>渡邊久仁子 (三・辻小教頭) 三好 憲昭 (大・丹生小教頭)</td></tr><tr><td>3</td><td>龜山 典良 (仲・白方小)</td><td>山内 秀則 金崎 美穂 (仲・琴平小) (高・亀阜小)</td><td>高木 京子 (丸・郡家小)</td><td>八木 育夫 (大・津田小教頭) 香川 佳和 (丸・飯野小教頭)</td></tr><tr><td>4</td><td>廣瀬 強 (大・石田小)</td><td>寒川 英樹 杉本 佳子 (丸・郡家小) (大・志度小)</td><td>向山智恵子 (大・引田小)</td><td>田井 秀典 (二・上高野小教頭) 徳田 仁司 (高・教育文化研究所)</td></tr><tr><td>5</td><td>宮武 昭裕 (三・桑山小)</td><td>平川 博 江崎 衣代 (三・大野小) (大・石田小)</td><td>石川 博健 (三・河内小)</td><td>古沢 博美 (高・四番丁小教頭) 松下 繁美 (綾・園分寺南部小教頭)</td></tr><tr><td>6</td><td>山下 晃 (高・仏生山小)</td><td>佐々木 誠 宮武 克明 (高・仏生山小) (綾・宇多津小)</td><td>稲田 耕一 (高・中央小)</td><td>梅木 正信 (仲・榎井小校長) 野島 悟 (高・三溪小教頭)</td></tr></table>	学年	司会者	提 案 者	記録者	指 導 者	2	鴨井 俊徳 (木・田中小教頭)	長谷 民子 山路 晃代 (香・浅野小) (三・仁尾小)	三好 啓治 (小・大坪小)	渡邊久仁子 (三・辻小教頭) 三好 憲昭 (大・丹生小教頭)	3	龜山 典良 (仲・白方小)	山内 秀則 金崎 美穂 (仲・琴平小) (高・亀阜小)	高木 京子 (丸・郡家小)	八木 育夫 (大・津田小教頭) 香川 佳和 (丸・飯野小教頭)	4	廣瀬 強 (大・石田小)	寒川 英樹 杉本 佳子 (丸・郡家小) (大・志度小)	向山智恵子 (大・引田小)	田井 秀典 (二・上高野小教頭) 徳田 仁司 (高・教育文化研究所)	5	宮武 昭裕 (三・桑山小)	平川 博 江崎 衣代 (三・大野小) (大・石田小)	石川 博健 (三・河内小)	古沢 博美 (高・四番丁小教頭) 松下 繁美 (綾・園分寺南部小教頭)	6	山下 晃 (高・仏生山小)	佐々木 誠 宮武 克明 (高・仏生山小) (綾・宇多津小)	稲田 耕一 (高・中央小)	梅木 正信 (仲・榎井小校長) 野島 悟 (高・三溪小教頭)						
学年	司会者	提 案 者	記録者	指 導 者																																	
2	鴨井 俊徳 (木・田中小教頭)	長谷 民子 山路 晃代 (香・浅野小) (三・仁尾小)	三好 啓治 (小・大坪小)	渡邊久仁子 (三・辻小教頭) 三好 憲昭 (大・丹生小教頭)																																	
3	龜山 典良 (仲・白方小)	山内 秀則 金崎 美穂 (仲・琴平小) (高・亀阜小)	高木 京子 (丸・郡家小)	八木 育夫 (大・津田小教頭) 香川 佳和 (丸・飯野小教頭)																																	
4	廣瀬 強 (大・石田小)	寒川 英樹 杉本 佳子 (丸・郡家小) (大・志度小)	向山智恵子 (大・引田小)	田井 秀典 (二・上高野小教頭) 徳田 仁司 (高・教育文化研究所)																																	
5	宮武 昭裕 (三・桑山小)	平川 博 江崎 衣代 (三・大野小) (大・石田小)	石川 博健 (三・河内小)	古沢 博美 (高・四番丁小教頭) 松下 繁美 (綾・園分寺南部小教頭)																																	
6	山下 晃 (高・仏生山小)	佐々木 誠 宮武 克明 (高・仏生山小) (綾・宇多津小)	稲田 耕一 (高・中央小)	梅木 正信 (仲・榎井小校長) 野島 悟 (高・三溪小教頭)																																	
12:00	昼食・休憩																																				
12:45	開会式																																				
13:00	研究発表 本部提案「問いと論証の調べ学習～思考の質を高める学習を求めて～」 提案者 附属高松小 旅田 敏弘																																				
13:30	研究発表 学校提案「社会の変化に主体的に対応する力を育てる社会科学習」 提案者 東部小 川中 祥照																																				
13:50	講演Ⅰ「これからの社会科教育の課題－社会科の教員を育てる－」 講師 文部省教科調査官 北 俊夫 先生 記録者 南原 志伸(小・星城小)																																				
15:10	講演Ⅱ「現代学習過程論－子どもの認知過程をふまえて－」 講師 高松短期大学 池内 博 先生 記録者 大嶋 和彦(高・仏生山小)																																				
16:20	閉会式																																				

坂社研・東部小 提 案

研究主題

社会の変化に主体的に対応する力を育てる社会科学習

—学習者のよさが生きる場の構成と支援活動の在り方を求めて—

1 研究主題について

今春、第15期「中教審」が、文部大臣から「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の諮問を受け発足した。

その諮問内容では、社会の変化に対応する教育の在り方について基本的な検討の視点と検討事項として次の3つのことを取り上げている。

- (1) 今後における教育の在り方および学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方
- (2) 一人一人の能力・適性に応じた教育と学校間の接続の改善
- (3) 国際化、情報化、科学技術の発展等社会の変化に対応する教育の在り方

この3つの「検討の視点と検討事項」の中で、「社会の変化に対応する教育」と「一人一人の能力・適性に応じた教育」がキーワードになるであろう。

ところで、坂社研では、この2つのキーワードについて、従来から「社会の変化に対応する力」、「学習者のよさを生かす教育」という2つの視点から研究に取り組んできている。

(1) 社会の変化に対応する教育

「社会の変化」というとき、一般に、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化などが、その視点として取り上げられている。これらの「社会の変化」について、学校教育はどのように対応していくことが望まれるのであろうか。

坂社研では、次のように「社会の変化」と学習者との関係をとらえている。

◇高齢化社会への変化

人生80年の時代となり、目的を持ち、豊かに充実した人生を自ら切り開いていく生き方を身につけることが求められている。そこで、学校教育では、学校週5日制への対応を考慮しつつ、生涯にわたって学び続けるための資質や能力の育成が必要となる。

◇情報化社会への変化

様々な情報が氾濫し、マルチメディア時代となる将来、情報を主体的に処理する力が求められる。学校教育では、情報及び情報手段を主体的に選択し、活用していくための個人の基礎的な資質の育成が必要とされる。

◇国際化社会への変化

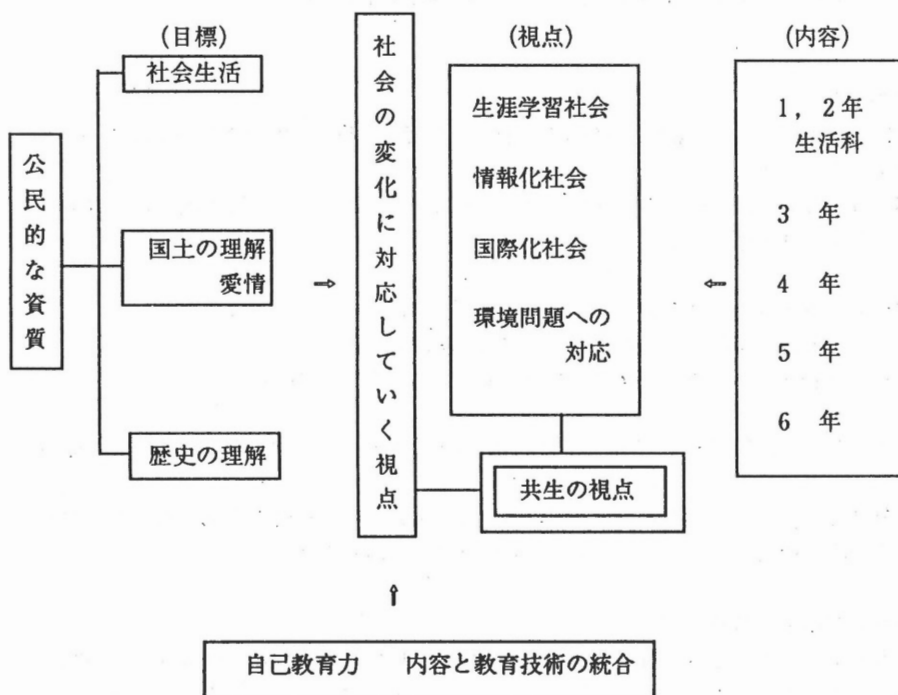
国際化社会が進行し、世界の中の日本人としての生き方が求められている。学校教育では、我が国の文化と伝統を理解し、大切にすることを。と同時に、他国の文化や生活を正しく理解し、共に生きる感性と態度の育成が必要となる。

◇環境に対する変化

環境問題について、国内の環境問題にとどまらず、地球環境の危機としてとらえなければならない状態になっている。学校教育では、かけがえのない国土や地球の環境に目を向け、人間と自然が共生する地球社会を築いていこうとする意識や態度を育てなければならない。

このように「社会の変化」と学習者の関係をとらえたとき、社会的なものの見方や考え方を育成する社会科学習では、学習の対象となる社会事象も、「社会の変化」に対応した視点でみていかなければならない。

こう考えたとき、社会科の目標と内容との関係に、次のような構造が生まれてくる。



ところで、最近、「共生」ということばをよく耳にする。これは、本来、生物学用語で「種類の異なる生物と一緒に生活すること」を意味するものである。（ブリタニカ国際大百科事典）

環境白書では、「共生」は、環境に適切に働きかけ、賢明な利用を行うとともに自然と人との間に豊かな交流を保つことによって健全な生態系を維持し、回復し、自然と人間との共生を確保する。」と記し、自然と人間の在り方を述べ、「循環型経済社会システム」への転換を示唆している。

また、建築家黒川紀章は、その著「共生の思想」で、「お互いの個性や文化を認めつつ競争し、対立し、批判しつつ協力する『共生の時代』に我々は生き始めている」と記し、「共生」の意味づけをしている。

今、世界に目をやるとき、平和、民族、環境などの諸問題は、世界的な広がりを見せ、複雑かつ深刻になっている。それについて、グローバルな視野で多面的に、総合的に考察し、人類の相互依存関係と、相互理解・協力がこれからの社会生活に不可欠であることの理解と意識化が求められている。つまり、「共に生きる」こと、個の確立のもとでの相互依存関係こそが、21世紀の在るべき社会とされようとしているのである。

そこで、この共生社会に参画するための「自立=共生」の資質と能力の育成という点から、社会、社会事象をみることもこれから必要とされる視点となるべきであろう。

取り入れていきたい視点「共生」の持つ意味がここにある。

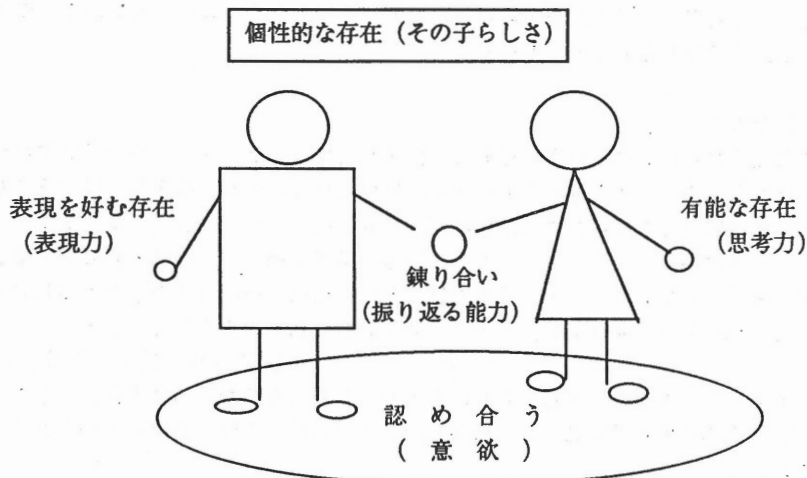
(2) 学習者のよさを生かす教育

これからの学校教育は、社会の変化に対応し、学習者（子ども）たちが心豊かに主体的に、創造的に生きていくことができる資質や能力の育成を図ることが求められている。そのために、教師の側に立ち知識や技能を身につけさせることを重視した教育から、学習者の側に立ち学習者自ら主体的に判断し、表現したり、行動したりできる資質や能力の育成を重視する教育への転換が求められている。そして、学習者のよさや可能性を生かすことを根底に据え、自ら学ぶ意欲と思考力、判断力、表現力などの能力の育成を重視する学力観に立つ教育を展開することが望まれている。この学力観に基づいて、学習者一人一人が学習活動に主体的に取り組む、これらの活動を通して、これからの学習や生活に生きて働く力を獲得することのできる学習を展開する必要がある。

社会科学習の場合、学習者一人一人が、社会的事象に進んでかかわり、自分の課題を発見し、それを解決するための計画を立て、観察表現活動や体験的な活動、思考操作など多様な学習活動の中で、社会的なものの見方や考え方を身につけていかなければならない。言葉を変えて言うならば、関心・意欲を基盤として、学びの対象である教材（学習材、典型材）に学習者一人一人がかかわり、そこで思考力や判断力、技能、表現力などを十分に練り上げ、学習者自身が自己拡充しなければならないのである。

そのためには、学習者のよさのとらえ方を明確にし、教材（学習材、典型材）の価値や在り方を追究したり、学習者のよさが発揮できるように支援をしたりすることを考えた「学習者のよさを生かす教育」を創造しなければならないと考える。

【学習者（子ども）をこうとらえる】



ア 学習者は、一人一人が個性的な存在である。

ものの見方や考え方の中にあるその子らしさ

イ 学習者は、自ら問題解決していく有能な存在である。

自分なりの意味体系を構築していく有能さ

ウ 学習者は、本来、表現を好む存在である。

素直に自分の思いや考えを表現する力

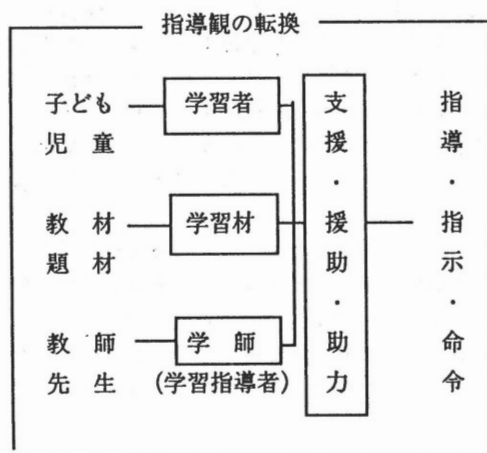
エ 学習者は、認められると自信を持ち意欲的になる。

温かい人間関係の中での存在感

オ 学習者は、学習者同士の練り合いで高まる。

獲得した意味体系を吟味、振り返る能力

【「学習者（子ども）のよさを生かす教育」とは】



学習者一人一人が、自分の考えを持ち、自分のよさや可能性を生かし、自分らしい生き方の体系をつくりあげて、主体的に生きていくようにすることを支援し、共感する営みである。

- ・学習者の支援として
- ・学習者の反応（姿）に学ぶ
- ・五者精神を身につけて
（学者、役者、芸者、易者、医者）

2 研究をすすめるにあたり 一取り上げていきたい「共生」の視点一

社会の変化に対応し、学習者のよさを生かす教育を求めていくにあたり、取り入れていきたい1つの視点がある。それは、「共生」という視点である。

（1）今、なぜ「共生」なのか

「今日、まさに激動の世界における日本や日本人の生活や文化は、それらを世界や国際環境に位置付けて考えなければならない大きな潮流の中にある。21世紀社会の予測をみると、我が国の経済社会を取り巻く環境も国際化と密接に関連し、世界経済社会の相互依存がいつそう強まる中で、我が国の国際的地位はさらに高まり、人、モノ、カネ、情報、環境問題などあらゆるものが国境を超え、ボーダレス化、地球化していく。・・・日本や日本人の生活は、国際理解や協力の精神に基づく、各国・各民族との相互依存と共存共栄、つまり「共生」なくして成り立たなくなっている。」

（篠原昭雄，社会科教育N0387）

21世紀を生きるものは、「ちがいを認め、ちがいを生かす」能力を持つ「地球市民」としての生き方が求められる。個人の尊厳が重んじられ、異質との共生、自然と人間の共生が求められる時代が到来すると考えられる。

それゆえに、未来を生きる人にとって、「いま、ここ」への適応方法を考えることのみならず、「いま、ここ」という閉鎖空間、排他性を克服した「未来」「異文化」「自然」などに対するものの見方、考え方が求められる。

ここに、「共に生きる、生かし合う」関係としての「共生」の視点が必要とされるのである。

（2）「共生」の視点とは。

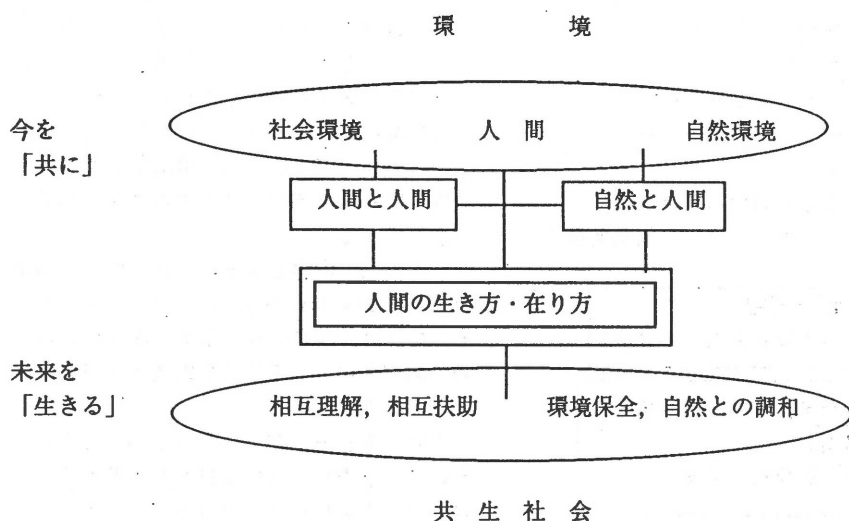
「共生」とは、個の確立、個の存在を認めたうえで「共に生きる」ことを意味する。そのように規定するならば、「共生」を考えるうえで、次の2つのことが課題となる。

1つは、「共に生きる」というときの「共に」を、何に定めるかということである。2つには、「共に生きる」という言葉から、今だけではなく、未来を志向するものとしてどのような状態を描こうとしているかということである。

その課題について、「自然」、「人間」という環境や社会を構成する大きな2つの要素から切り込むこととした。

それは、私たち人間は、あらゆる生命体とともに自然環境の中で生き、生かされていること。また、人間は、人間社会の中の一人として存在しながら、様々な人々とのかかわりのなかで生活していることを大切にしたいからである。

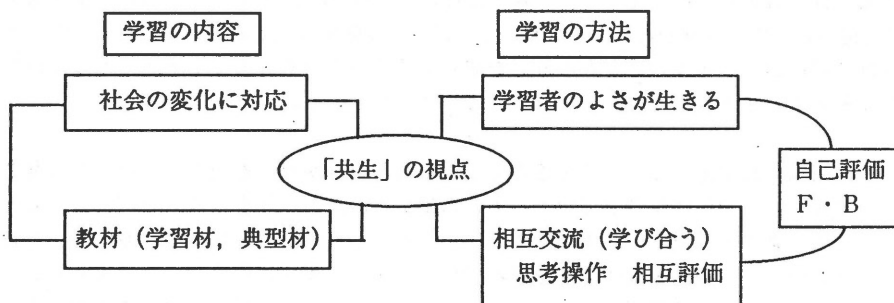
そこで、「共生」の視点として、自然と人間との共生、人間と人間との共生を取り上げることとした。そして、近未来社会を「人間と自然が調和し、人間と人間が相互理解するような共生社会」として位置付けることとした。



(3) 社会科学習と「共生」の視点

坂社研の目指す「社会の変化に対応し、学習者のよさが生きる社会科学習」に、共生の視点から迫っていくとき、具体的にどのようなことに留意すればよいのだろうか。

それについて、学習の内容と方法から次のように考えることとした。



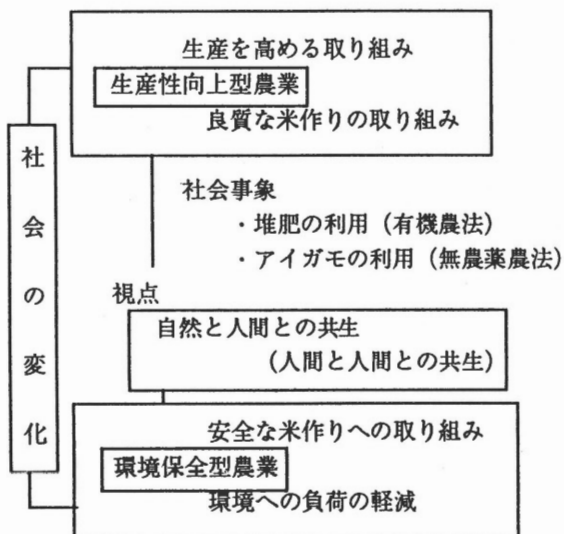
① 社会の変化に対応して、学習内容をみる1つの視点として

社会科は、主として人間と人間とのかかわりや、人間と社会や自然、文化などのかかわりを

学ぶ教科である。多様に変化する社会において、そのかわりを学ぶ1つの視点として、「共生」を取り入れることにより、未来社会に生きる個人としての生き方や在り方を学ぶことができると信じる。

ここでは、5年生の農業生産の学習を例に取り上げ、学習内容をみる視点としての「共生」について考えてみることにする。

今、農業生産の在り方が問われている。その1つに、環境保全型農業への取り組みがある。平成8年版の教科書をみると、化学肥料や農業に関する記述の中に環境や食品の安全性を取り上げているものが少なくない。



農業白書の中にも、「環境保全型農業の総合的な推進」という項目を設け、農業が持つ環境保全機能について述べている。

こうしてみると、農業学習の単元において、従来の自然を生かした生産性向上型農業における人々の工夫や努力についての展開だけではなく、環境保全型農業への取り組みの重要性を学習する展開も必要となってくる。

その際、内容をみる視点として、「環境問題への対応」が取り上げられる。しかし、その視点は、現在の社会事象をみる際には有効であろうが、未来社会を創造する場合にはどうであろうか。

人間の生き方、在り方をみつめる社会科において、求められるのは自然と人間生活との在るべき姿を描くことではなかろうか。

そう考えるならば、「環境問題への対応」

という視点だけではなく「自然と人間との共生」という新たな視点が必要となるのである。

② 学習者のよさが生きるための学習方法を考える視点として

東部小学校のめざす児童像のひとつに「すすんで子」があり、具現化施策として「自進友楽学習の実践」を取り上げ、自ら進んで友と楽しく学習することを勧めている。学習活動の中で、友達との交流を大切にした学習法である。

文部省教科調査官北俊夫先生は、「新学力観に立つ社会科」の中で、社会科の指導法上の課題解決の視点として、「かわり」を大事にしながら学習を組み立てることを勧めている。そして、社会科学習における4つの「かわり」を取り上げている。その1つである「友達や教師とのかわりを大事にする」ことについて以下のように述べている。

「人間はだれでも、まわりのさまざまな人たちとのかわりを通して、自己を啓発し、より望ましい方向に成長させていく。人との望ましいかわりをつくり上げていくことは、社会で生きていくための基本である。・・・子どもたちは、学級社会において、友達や教師とかわり、それぞれのよさを学んでいく。また、相互に認め合い、励まし合いながら、さらに豊かな人間関係をつくっていく。これは、集団で生活しているよさでもある。」

(「新学力観に立つ社会科授業の理論と方法」明治図書)

今、学習者のよさが生きるための学習方法をみる視点として取り上げようとしている「共生」

は、「共に生きるもの」として、「共に学び合い、高め合う」関係を学習活動の中につくりだすことを意味している。

学習は、一人一人の中に成立しなければならないことは当然のことである。かといって、一人学習のみでは成立し難い。友達同士が手を取り合いながら共に励まし合い、相手のよさを感じ、自分のよさを意識していく過程で、自らの学習を深め、個別に学習を成立させていくものであろう。

このようにみると、社会科学学習における「共生」、とりわけ学び方においては、いかに相互にかかわる場や機会を設定するかが大切にされなければならない。それは、相互にかかわることを通して、相互に評価したり、自己の変容を自覚したりすることができるからである。

言葉を変えて言うならば、共生の視点で学習を組織することは、豊かな人間関係を育てること、自分の考えを深めより確かなものにするに通じるものなのである。

3 研究内容について

「共生」の視点を取り入れ、社会の変化に対応し、学習者のよさを生かす教育において、学習活動は、教材のよさや教師や友達などのよさとのかかわり合いから、学習者一人一人の思いや願いに基づいてよさや可能性が生かされ、高められ、膨らんでいくプロセスとしてとらえられなければならない。

そこで、学習者のよさを生かすことについて

- ア 教材（学習材）のよさとのかかわり
- イ 他者のよさとのかかわり
- ウ 自己のよさとのかかわり

という3つのかかわりを取り上げ、

- ① よさが生きる場の構成
- ② 支援活動の在り方

という2つの視点を設け、実践的に研究をすすめることとした。

とりわけ、社会科、生活科における「学習者のよさを生かす」ということでは、次の「社会科学学習指導の改善の視点」をもとに、教材とのかかわり、人とのかかわりを重視し、4つの視点から研究主題に迫ることとした。

社会科学学習指導の改善の視点

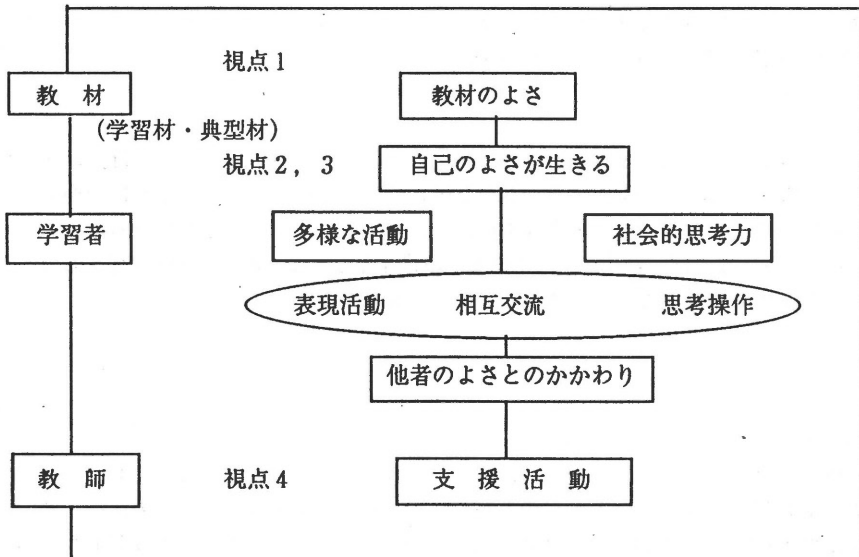
- ① 「考える力」、「表現する力」を育てる
- ② さまざまな「かかわり」を大事にする
- ③ 問題解決能力を育てる
- ④ 体験的な学習活動を組み入れる
- ⑤ 子供のよさや可能性を伸ばす評価を充実する

(小学校社会科指導資料「新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造」)

教材とのかかわり、人とのかかわりを求めて

- 視点1 学習者が意欲的に取り組める教材の開発、精選（教材のよさ）
- 視点2 学習者が主体的に社会事象にかかわる活動の工夫（自己のよさ）
- 視点3 学習者が、自分の中に自分なりのものの見方や考え方の体系を確立すること
(自己のよさ、他者のよさ)
- 視点4 学習者がよさを発揮し、主体的に取り組むための支援の在り方

【研究主題に迫るために】



視点1 学習者が意欲的に取り組める教材（学習材，典型材）の開発，精選

教材とは、「学習者が学習の対象として意識し、意欲をもって深くかかわり、自己のよさを十分に発揮しながら学んでいくための、教育的にみて価値のある素材である。」といわれている。このことは、学習者のよさが生きる条件のひとつとして、教材のよさがあげられることを意味している。

そこで、学習者一人一人が思いを寄せ、意欲的にかかわり、学習者のよさが発揮できる教材開発という点から、次のような取り組みをすることとした。

- ① 教材を選択する際の基本的な観点としての単元の目標，内容の分析
- ② 単元における社会の変化に対応する視点として，取り入れていきたい「共生」の視点
- ③ 学習者が自ら考え，主体的に判断したり，表現したりする学習活動ができる教材の選択（＝学習材）



- ◇「社会の変化」を吟味し，学習者の社会に対する認識を深める。
- ◇人間の生き方，在り方，すばらしさが発見できる。
- ◇学習者が，問いかけ，知的満足感が得られる。

視点2 学習者が主体的に社会事象にかかわる活動の工夫

社会事象を観察表現することが学習成立の大きな要因となる社会科学学習において，体験活動や表現活動の構成とそれを生かした学習の構造化が求められる。学習者の個々のよさは，表現活動や表現物の中に表出されるからである。また，表現物をもとに話し合ったり，表現物を膨らませる活動をすることによって社会的意味に迫ることができる。

- ① 調べ、表現する力の育成 一単元を表現物や体験活動でつなぐ学習方法一
- ② 主体的にかかわる工夫として、社会科を核にした学習内容の関連的指導法の工夫



- ◇ 観察する力と表現する力が身につく。
- ◇ 総合学習、教科統合、教科等統合などの工夫により、多様な学習活動ができる。

視点3 学習者が、自分の中に自分なりのものの見方や考え方の体系を確立すること

学習者一人一人の中に構造化された自分なりのものの見方や考え方の体系は、温かい人間関係を基盤とした学習者同士の学び合いからできる。そして、学び合いは、表現活動と思考操作の活動がその中核をなし、相互交流という学習形態と、第2次表現という個々の表現活動により、知識構造の変容を促すのである。

そのために、次のようなことを単元や学習過程で考えていくこととした。

- ① 表現物を生かし、思考の類型に基づいた思考操作のある学習過程の構成
- ② 知識構造を変容させるための典型材の導入の在り方
- ③ フィード・バックや相互交流による相互評価の工夫



- ◇ 比べたり、つないだり、操作活動によって考える力が身につく。
- ◇ 典型材をもとに、培いたい社会認識に迫ることができる。
- ◇ 第1次表現をめぐるの相互交流と典型材導入後の知識変容をめぐるの相互評価としての相互交流から、自己のよさ、他者のよさに気付くことができる。

視点4 学習者がよさを発揮し、主体的に取り組むための支援の在り方

支援とは、学習者が自らの発想を生かし、主体的に、創造的に、意欲的に学習をすすめ、自己実現が図れるようにするための「支援・援助」といわれている。

学習者のよさを生かす教育では、次のようなことを大切にすることとした。

- ① 学習者が、課題を見つけたり、意欲的に解決したりすることを支援する。
- ② 学習者が、自らのよさを発揮させる場や機会を保証する。
- ③ 学習者が、自分のよさ、友達のよさに気づき有用感を持つようにする
- ④ 協力教授による学習指導の在り方。



- ◇ 意欲的に学習に取り組み、自己の課題を解決しようとする態度が育つ。
- ◇ 自他のよさを生かしたり、よさに気付いたりし、お互いを認め合う態度が育つ。
- ◇ 課題解決に向かって、先生と共に学ぼうとする意欲や態度が育つ。

4 内容と方法にみる「共生」の視点 ―提案授業をさぐる―

「共生」の視点を取り入れ、教材のよさを生かす、学習者のよさが生きる学習指導の構成、そして教師の支援活動の在り方という大きく3つの研究内容を掲げ、提案授業をすることとなった。

ここでは、それぞれの授業について、その主張についての概略をまとめることとする。

学年	内容（社会の変化に対応して）	方法（学習者のよさが生きる）	他教科等の関連
	人間と人間、人間と自然	表現活動 思考操作・相互交流	
2	・自分と自分にかかわりのある人の、心と心のつながりを求める。 ・時候の挨拶文にみる自分と自然（季節感）とのかかわりを感じる。	・島の友達に 季節感や伝えたい気持ちをお便りを書く。 ・季節感や伝えたい気持ちを膨らませる。	・国語 ・図工
3	・昔の人たちの道に対する願いと今の人たちの古いものと新しいものを共に生かそうとする心が、町の発展につながることを理解する。	・ねがいとくらしのうつりかわりを結んで記事をつくる。 ・情報コーナーから、道のできたわけを選び、記事をつくりその考えのよさを認め合う。	・国語
4	・自然、交通、産業などの視点から香川県をみつめるとともに、これからの町づくりは、自然と調和を図り、自然と共に生きる視点を持つことを理解する。	・県の特徴を表すマップづくり。 ・人と自然との調和を図った町づくりという視点から県の特徴を見直す。	・国語
5	・環境問題を調べ、自然環境と人間生活とのよりよい関係をつくろうとする願いを持ち、自分たちのことから始めようとする態度を持つ。	・緑の少年団活動への取り組み。 ・環境問題の原因を分類し、人間生活との関係から、自分たちのできる環境問題への取り組みを考える。	・創意活動の時間 ・道徳の時間 ・特別活動
6	・世界の平和や福祉にかかわる国連の働きから、それぞれの国と国、民族と民族などが、相互理解や相互扶助をすることがこれからの地球社会を考えるうえで不可欠であることを理解する。	・ポスター、絵本、紙芝居などを選択して、表現活動をする。 ・ユニセフの援助活動を自立のための援助という観点から見直し、それを取り入れた表現物に修正する。	・国語 ・図工

個が生きる認知過程の探究

—『問い』と『論証』の調べ学習—

—— 思考操作の深化を図る社会科学学習を求めて ——

香川県社会科教育研究会
旅 田 敏 弘

1 学力育成を能力・人間・知識から観る

新しい学力観については、「今までの知識の量的な習得への偏りを修正して、子どもの成長・発達や将来の生活に生きて働く能力（学ぶ意欲・思考力・表現力・判断力など）や資質（創造性豊かな個性・社会性）の育成を重視し、人間としての生き方・在り方を求める」と説明されている。即ち、児童一人一人の学ぶ意欲を大切にしながら、思考力、判断力、表現力などの能力育成を重視したものである。社会の変化に主体的に対応できる能力を育成することは、21世紀を生きる児童にとって必須条件と入っても過言ではない。だが、その一方で社会の構成員であり、自らの努力で公民的資質を高めなければならない側面も有している。従って、真の学力形成は思考力、判断力、表現力などの能力育成にとどまらずに、それらの能力を生かして、人間としての生き方・在り方を考える学力観ととらえたい。

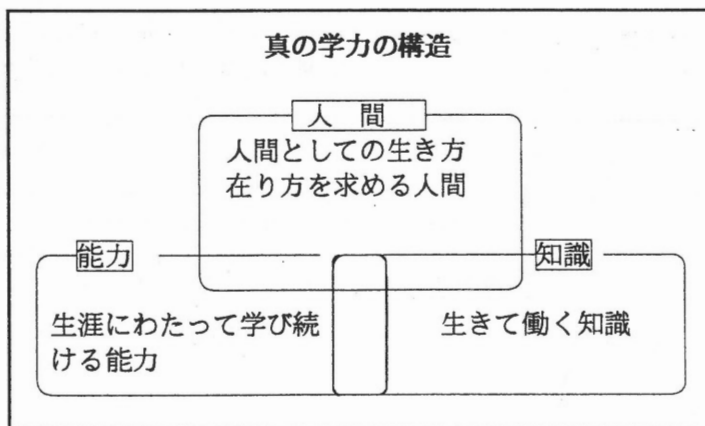
そのためには、単に社会事象を知る、人々の営みが分かるというだけでなく、それらのよさが分かり、社会の構成員としての誇りがもてる、また、課題に対しては、自ら社会に働きかけられるようにすることが大切である。

真の学力は、これに知識を加え、学力の構造を下図のようにとらえたい。

即ち、真の学力育成の中核を、人間とすることである。人間としての生き方・在り方、もっといえば、自他共に生き、互いに人間のよさを出し合い、認め合い、高め合うことを求める事を中核としたい。そして、それを支えるものに、能力と知識とを考えたい。

知識については、知識の量的な偏りを改めなければならないとしても、知識を軽視してはならない。子どもの認知過程を探究すると思考力・表現力・判断力などの能力は、知識と深い関わりをもって育成されるのである。

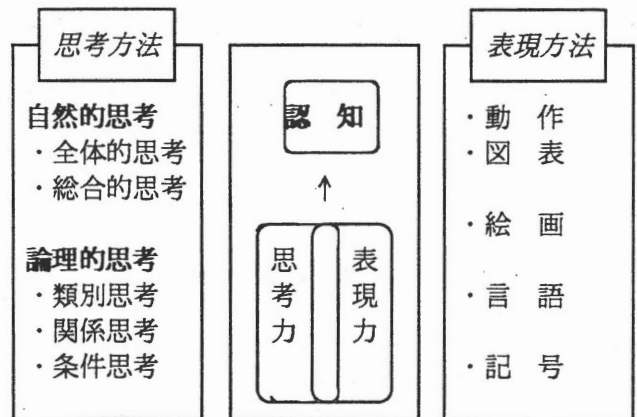
記憶中心の知識ではなく、生きて働く知識としてである。知識と能力との関わりは、能力を育てる知識と、新しい知識を得る能力の二つの関わりをもつ。思考力・表現力などの能力は、子どもの発達を促す内容をもつ知識を媒介として育てられ、新しい知識を獲得していく。そして、その知識が生きて働く知識として、より高次の思考力・表現力などを育てていく。このように、知識は、能力とともに生かされ、高められていくものであることからして、貧弱な知識や情報では役に立たないのである。そして、この知識は、一時間の授業の過程では、授業の始めの一人一人の子どもの知識構造と一時間の授業の終わりの知識構造とでは、変容し、深化していなければならない。このように知識は、重視されるべきなのである。



2 思考と表現の一体化を図る

新しい学力観では、思考力、表現力等の育成を重視している。思考と表現の一体化を図ることで個の認知の過程に即した学習の糸口が見えてくる。

思考方法としての、自然的思考、(全体的思考、総合的思考) 論理的思考(類別、関係、条件思考)の組み合わせにより、思考操作の重層化を図ることが可能になってくるのである。



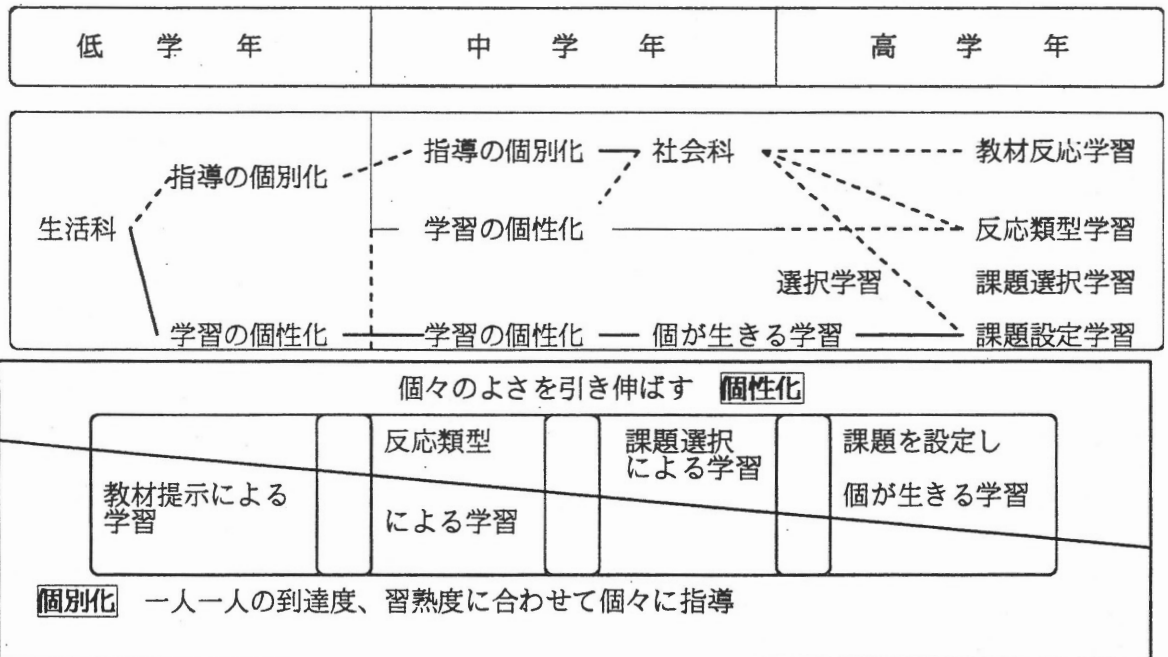
3 思考操作の深化を図るために

(1)個に応じる学習の展開

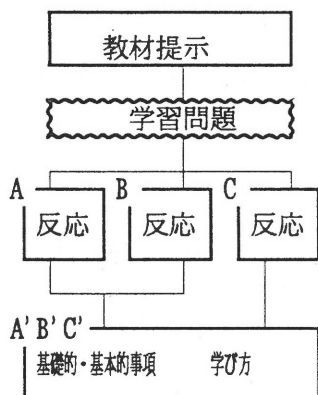
①個に応じる学習の類型

個に応じる学習には、個別化と個性化の二つの側面がある。個性化を重視する学習は、教師が教材を提示し、基礎基本の定着を図るものである。一方、個性化を重視する学習は、児童一人一人が児童一人一人が自分の課題をつくり、解決方法や操作の仕方まで自分で考え、結論に導くものである。そして、この二つの学習の間には、実に様々な学習の様式がある。児童の反応を教材にし、相互に交流したり、不十分な点を教師が補ったりして基礎基本の内容にせまる教材反応学習。課題を児童が選択し、論証の仕方は異なるものの、それぞれが共通な概念を形成する課題選択学習などがある。

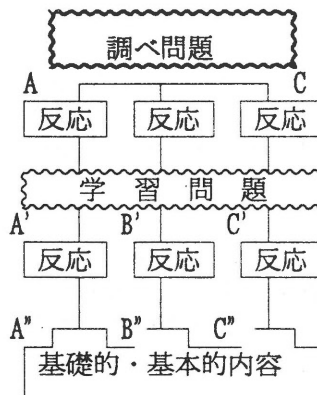
どの類型を選ぶかは、教材の特質、児童の実態、教師の力量や願い等の観点から十分に吟味して、一人一人の児童が意欲をもって学習に取り組めるように配慮する必要がある。



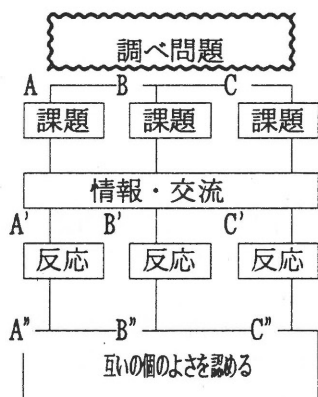
教材反応学習



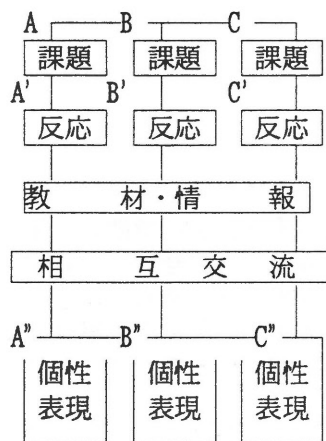
反応類型学習



課題選択学習



課題設定学習



《教材反応学習》

基礎的・基本的な事項の徹底や学び方の基本を確実に習得し、知識・技能を身に付ける学習である。「個別化」を図るよう支援し、理解を深め、確実に記憶することの学習の意味を再認識しなければならない。

《反応類型学習》

学力形成を図る中で能力育成の中心になる学習である。教材に対し、思考操作や表現操作をしながら、基礎的・基本的内容を得る知識構造を深めていく学習である。

「個別化」「個性化」を図るよう支援・援助する。

《課題選択学習》

学級の課題をいくつかの課題に分け、個々の子どもがそのうちから選択する学習である。課題によって教材（情報）と学習方法を選択し、子どもに任される学習である。

目標値をもって自己評価や相互評価を行うことにより、学習の質の向上を促す。「個性化」のための援助が肝要である。

《課題設定学習》

個性重視の教育が求める「個性化」の最も強い学習である。課題を子ども自ら設定し、決定し、常に目標値を高めつつ、見通しを持って取り組むことが求められる。表現物の質が問われる。「個性化」のための援助は、開かれた学として、地域に人材と情報環境が得られるよう用意しておく必要がある。

(2)個人差の考え方

従来、個人差と言えば、学習意欲差、学習速度差、到達度としての学力差、個性差などを指していた。つまり、到達度に合わせて、つまずきを解消しようとする考え方を指していた。これは、個別化を重視する学習の考え方である。

もちろん、個性差の中に、児童の興味・関心、表現方法等の違いなどから個性を生かそうとする動きも見られたが、個性化を重視するためには、それよりも一歩進んで個のよさが生きるとらえ方が必要である。

そのため、個のよさを認知スタイル、学習スタイルからとらえ支援・援助していくことが大切である。

・学習意欲差

・学習速度差

・達成度としての学力差

学習スタイル			認知スタイル		
A	集中型	拡散型	あ	イメージ型	言語型
B	多面型	一面型	い	感覚型	論理型
C	抵抗型	柔軟型	う	集中型	拡散型

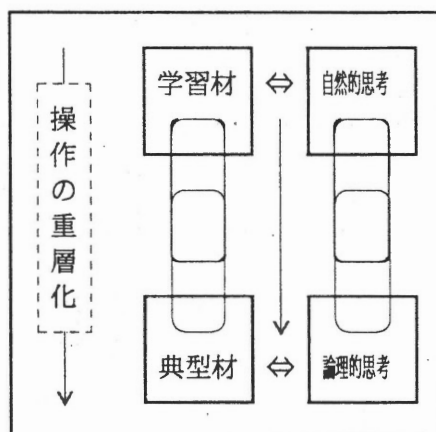
(3) 学習材と典型材を組み合わせた教材開発

新しい学力観に立つ授業は、学ぶ意欲をもって思考・表現判断などの能力を育成し、結果として、基礎的・基本的内容を獲得する授業を言うのである。

そして、この能力育成を重視した、教育の改善が今、各地で実践されているところである。ところで、この新しい学力観に立つ授業についてであるが、従来の知識・理解中心の授業と変わっていないのが、取り扱う『教材』であり、『教材の考え方』である。

確かに、基礎・基本の内容を獲得していくことを重視した授業においては、教科書教材を典型材として重視してきた。このことは大変重要な『教材』の一面である。

しかし、新しい学力観に立つ能力育成を重視した授業においては、思考力・表現力・判断力を育成するのにふさわしい『教材』考え方が成立しなければならない。子どもが意欲をもち、個の能力に応じた取り組みができる、より具象性のある『教材』が必要なのである。この教材を学習材と呼ぶことにする。すなわち、教材を『典型材』と『学習材』とから見ていこうとするものである。教育事典によると教材とは、『一定の教育目的を達成させるために選択された教育の具体的内容、文化的素材であり、あるいは、それを学習に適するように再構成し直したもの』と定義されている。



- ①教材のままで、個の能力に応じた取り組みはできない。
- ②学習材になるか、どうかの吟味が大切
(地域性、生活性、文化性)
- ③その学年の発達段階を踏まえた教材、学習材への加工

個が思いやり、働きかける学習材になっているかどうか吟味することが重要

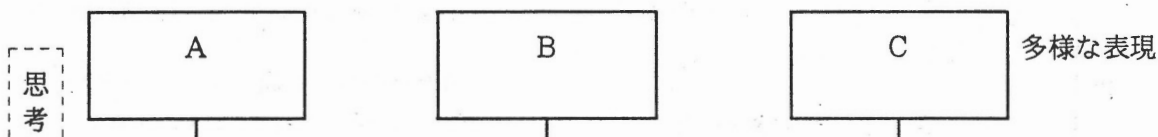
こう考えると、「典型材」は、一定の概念を得る教材であり、「学習材」は、具体事象をもとに学びの能力を育成する教材であり、内容的には、「地域性」「生活性」「文化性」をもつこと、方法的には、「学び方・操作方法」を工夫することができることが要件であると考えられる。そして、授業は、この「典型材」と「学習材」との組み合わせにより、成立すると考えられる。

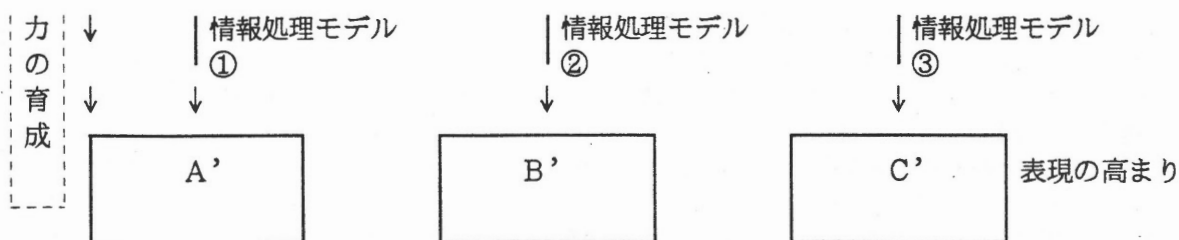
(4) 情報処理モデルの開発

児童自ら内発的に動機付けをし、意欲が連続していくためには、表現活動を中核とした学習活動が必要である。だが、表現方法については、教師が指示を与え、画一的なものになることが多かった。個のよさが生きるためには、できるだけ児童の自由な発想から生まれる多様な表現方法を認めることが大切である。

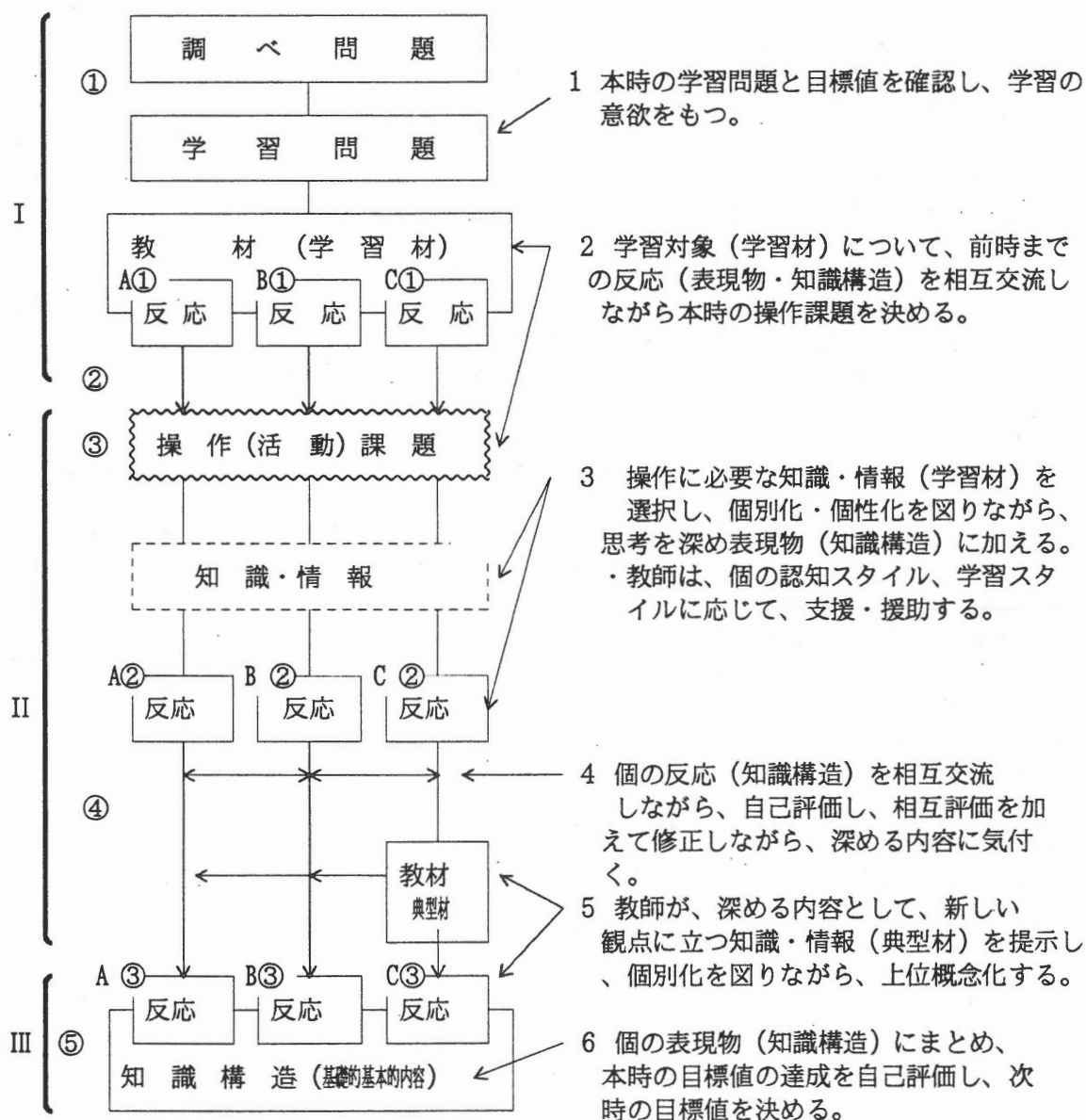
表現と思考は一体となったものであるため、表現活動の中に思考力を育成する場がある。新しい学力観では、社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視しているが、それは、即ち、多様な情報処理モデルを身に付け、上手に使いこなす力だと言える。しかし、これまで、どの教科とも知識・理解に力点が置かれていたために情報処理モデルについては、あまり意識してこなかった。

今後は、時間意識を育てる情報処理モデル、因果関係を育てるモデルというように情報処理モデルの在り方を探っていくことが思考力育成につながるのである。





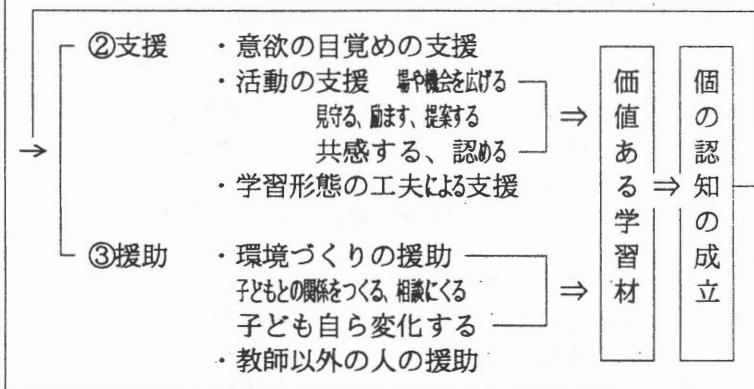
『学びの基本』を探究する学習類型（反応類型学習）・ 認知過程
学習構造 認知過程の解説



- (5)個が生きるための支援・援助活動 ①内容・働き
- ア 環境による
 - イ 教師が子どもに直接関わる
 - ウ 地域や家庭との連携による

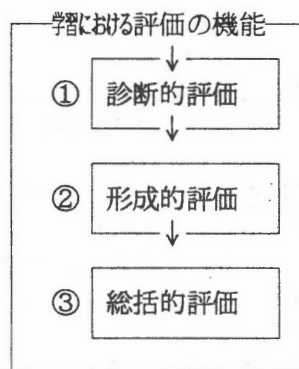
教師の支援・援助という、すぐに児童に直接助言を与えることだと考えがちである。確かに教師の支援・援助は大きな役割を占めている。だが、支援・援助活動は、他の児童の相互交流の場を設定したり、環境づくりを行ったりするような間接的なものも含めて幅広いものととらえたい。

このような支援・援助をもとに価値ある学習材によって、個人差のスタイルとのからみによって、個の認知の成立が見えてくるのである。



(6)新評価観の基本的な考え方

学習評価を機能的に分類すると、次の図にあるように3つあることが広く説明されている。この3つの評価は、発展的で相互に関係し合っている。「診断的評価」から「形成的評価」へ、そして「総括的評価」への過程は、1時間の学習でも考えられるし、単元全体の流れでも考えられよう。ところで、従来の評価、3つの評価のうち学習の事前的・準備的評価としての診断的評価と、一つのまとまりある学習が終了した時に学習の成果を総括的に行う総括的評価とを主として、それもペーパーテスト形式が中心の評価を行ってきた。また、形成的評価にしても、指導に役立てる教師サイドの評価が中心であった。新学力観、評価観に立つ場合どうしても認知の形成過程における子ども側に立つ評価が強く望まれるところである。以上、述べたことから、まず、「評価の仕方のどこが変わったか」について5項目あげておきたい。



- ① ペーパーテストだけの評価から学ぶ力（意欲、思考力、表現力、判断力）を評価することへ
- ② 結果の評価から学習の過程を評価することへ
- ③ 点数などの数量で測る評価から、子どもの活動、体験・表現物などで観る評価へ
- ④ 一時的な点の評価だけでなく、継続的な線や他と関連づけた面の評価へ
- ⑤ 指導に生かす評価、子どもが自己を固定的に観る評価から、自己の伸びを自覚し、自他のよさを認め合う評価へ。

ただ、これらは、従来の評価の仕方の積み上げの上に成り立つものであろう。しかし、これら、5項目を貫く特質は、「形成過程における自己評価の在り方」である。以下、このことについて述べる。

ア 形成過程における自己評価

社会科授業は、社会辞しようについての見方や考え方を深めつつ、社会的な基礎的基本的内容を認知していく過程を通る。この認知の過程、概念を形成する過程は、次の図で示す、ア自己評価イ目標値 ウ支援・援助、相互交流の3つの事項で説明することができる。

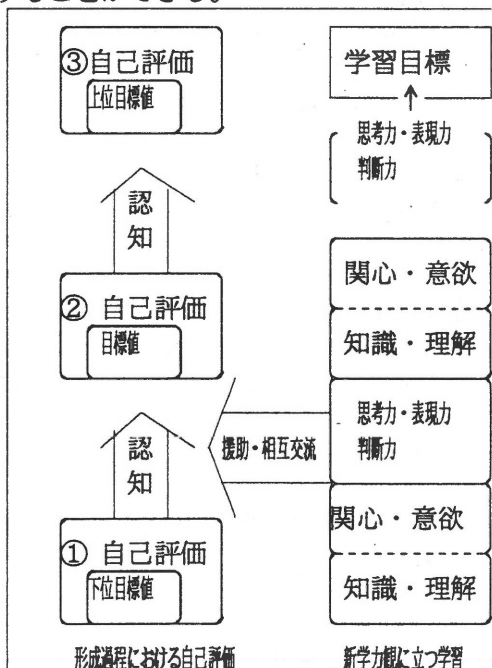
まず、既存の知識や能力をもとに、意欲をもって、新しい社会事象に取り組み、自分の考えをもつ。これを自己評価①としよう。そして、どんなことを調べたり、分かっていたりしたいのか目標値（上位）に向かって、学習を展開する。その認知の過程で、思考力、表現力等を働かせたり、教師の支援・援助や相互交流を働かせたりして、自分なりの認知に到達していく。その過程が自己評価②になる。こうして、次なる目標値（上位）へと発展していくのである。

次にア、イ、ウの3つの事項についていくらか補説しておくこととする。

《自己評価》子どもが自らの学習の過程で、基礎基本や学び方についての自分のよさや伸びを確かめる評価である。

《目標値》自分のよさや伸びを自己評価する過程で、意欲をもって学び続けるために、自分をより生かし、伸ばそうとして、相互交流や他者評価によって、今より、一層上位の目標を自分で設定する。この価値ある目標を目標値とする。

《支援・援助》子ども自らが自己評価を連続させ、目標値を高めながら学習を進めていく。その折り、情報を選択できる環境づくり、思考操作の新しい視点、表現技法のヒント、個に応じた学習の手引き等によって、子どもの活動を支援・援助するものである。



イ 自己評価の仕方

自己評価の仕方として、次の3つが考えられるが、広く一般的にとられているのが「自己評価カード」等によって、項目ごとにチェックしていく方法である。

①自己評価カードによる方法

②絵や文などに表現することによる方法

認知の過程において、表現しながら思考し、思考しながら表現することからして、最も自己評価に適した方法と言えよう。表現には、絵を主体にしたものとしては（続き絵、紙芝居、絵話等）文としては、（作文、新聞、物語、解説文等）、また、目標や反省文を書く等、多様であり、情報化社会においてコンピュータやビデオの活用による表現もある。

③学習環境を整えることによる方法

学習環境を整えることで、一つは、情報の整理がある。多様な情報の中から活用し、学び方を自己評価する方法である。また、一つは、グループで対話しやすい環境をつくり、相互交流によって自己評価する方法である。

自己評価を中心に述べてきたが、とにかく、学習者側に立ち、子ども一人一人の可能性がよさを伸ばす評価へと、質的な転換を図っていかなければならない。

以上、新しい評価観を整理すると次のようになってくるのである。

学習評価の分類

- | | | |
|----------------|-------------|---------|
| ア 診断的評価 | イ 形成的評価 | ウ 総括的評価 |
| ・指導計画立案のため実態調査 | ・学習中の形成中の評価 | ・絶対評価 |
| | | ・相対評価 |
| | | ・個人内評価 |

・評価の原則

ア 評価は「正解」が一つだけの評価でなく、「正解」そのものが個によって中身が違うことを重視する。

イ 評価は、結果としての知識・理解、技能だけでなく、そこに至る過程を重視する。

自己評価

ア 自己強化のメカニズム、自己感情の喚起によって、内発的動機付けを高める。

イ 自分がどのような情報処理をしているのか知り、自分の学び方を意識化する。

自分の目標値をもち、自己調節、自己統制、自己伸張を可能にする。

ウ 教師は、指導上欠かせない、他者評価の情報を提供するとともに、自他の交流による他者評価を用いる。

【参考図書】 個が生きる認知過程の探究

—真の学力形成を目指す教育課程—

香川大学教育学部附属高松小学校 著 明治図書

新学力観に立つ社会科授業

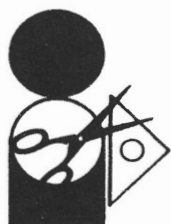
—「問い」と「論証」の調べ学習—

香川県小学校社会科教育研究会 著 明治図書

手づくり教材教具拝見

米づくりカードで考える力育成

香川大学教育学部付属高松小学校



付せんと画用紙で児童の論理力を養成——。香川大学教育学部付属高松小学校寄田啓夫校長、児童数六百八十一人の旅田敏弘教諭(こ)は社会の「安全な米づくり」の授業で、画用紙に付せんと張り付けて要点をまとめる「米づくりカード」を使用し、児童の考える力の育成に役立てている。

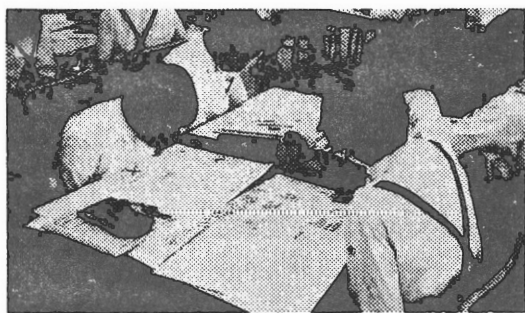
画用紙の上で試行錯誤

用意するのは付せんと画用紙で極めてシンプル、かつ経済的。付せんに米づくりに必要なさまざまな要素である土壌や用水路、気温、肥料、機械などを書き込み、これを米づくりに必要な稲(品種)と自然条件(土、水、温度)、人的な要素(肥料・機械など)に仲間分けして画用紙に張り付ける。稲に向かって機械から矢印を引いて「米づくりを能率的にする」と書いたり、自然条件三つを同じカテゴリーとしてイコールで結んだりするなど、要素の書かれた付せん同士の関係を矢印やイコールなどの記号を使って説明すること、論理的な思考力を養う。

付せんを簡単に移動できることが最大の武器。旅田教諭は「今までは絵カードを、画用紙に張り

付けておいた棒に差し込んで同様の教材にしていたため、一回作ったら直せず、表現に限界があったが、付せんを使うことで欠点は解消された」と長所を説明する。そもそものは高松市の社会科研究グループが考え出し、市内の社会科教師の間で流行しているという。

最大の効用は、付せんを移動することによって、児童が画用紙の上で試行錯誤を経験できること。



児童たちは最初、付せんに要素を書き、仲間分けすることに終始し、画用紙には付せんが並べて張ってあるだけの状態だ。しかし、資料などを見て調べたり友達のものを見たりするにつれて、想像力も膨らんで立派な作品に変身するという。

付せんが隅の方に単に並べて張ってある段階から、関係を表す線が次第に入っていく、付せんの横には説明を記した抜き書きも増えてくる。説明を書くスペースを作るため、だんだんと画用紙全体を使ってまとめるようになり、色鉛筆で絵をかき始める凝った児童も出てくる。そして、最後のまとめをするころには、色鮮やかな米づくりカードに仕上がる。

旅田教諭は「初めにビデオを見せて米づくりの要素を与えるが、途中で『天災に強い』や『自然にやさしい』などの観点からの資料を示すことで、新しい要素が加わり、付せんの数が一気に増える。しかし、その後選別作業を行うことによってその数は減っていく、まとまりが出てくる。児童の試行錯誤の過程を画用紙の上で見ることができ、教える上で役に立つ」と児童の様子を説明してくれる。

まとめでは、おいしい米に重点を置いた児童と安全な米に重点を置いた児童などに分かれ、それぞれの価値観に応じて意見発表が行われ、児童たちが考えた結果が示される。

「この単元では人と自然の構造を理解するのが目的。特に、社会科の授業としては、人がどのように工夫するかを児童たちに考えてもらいたい」と同教諭は授業の趣旨を強調し、「そのためには付せんを使った米づくりカードは気軽に作れ、児童たちの考えの推移が見られるし、他の分野にも応用できる教材だ」とアイデア学習法に自信をのぞかせる。

(橋本誠司 高松支局)

第 5 学年 社会科学習指導案

指導者 旅田 敏弘

研究主題 知識構造の変容を図る社会科学習の展開

1 単元名 安全な米づくり－日本の農業の基礎基本は何か－

2 単元について

(1) 子どもの課題意識が連続する単元化

本単元における基礎・基本は、「農業に従事している人々は、自然条件を生かしながら、生産活動を行っていること。交通や情報などの社会条件により生産が変化していること。消費者の食生活の変化に対応した生産活動が行われている。」ということである。農業白書によると、米作りの課題として、生産性の向上、後継者の育成・確保、消費者のニーズへの対応、農産物の安定的な供給、定住条件の整備、農村地域の活性化の6つがあげられている。そして、消費者ニーズへの対応ということでおいしい米づくり、安全な米づくりということが特に求められている。このことを視点として、日本の基礎基本にせまっていこうと考える。

(2) 主体的にかかわり新たな学びを生むための支援・援助

米づくりについて調べ、おいしい米をつくるために品種改良や育て方の工夫をしているということについて子どもたちは理解している。おいしい米をつくるということは、消費者のニーズへの対応であるが、最近では安全な米という消費者のニーズが高まり、有機農業や農薬の改良、消毒の回数を減らすといった様々な試みがなされるようになった。これらのことについて情報コーナーで子どもが自分で調べていけるよう環境設定し、品種・自然・育て方の3要件をつないで主張文が書けるよう支援・援助していきたい。

3 目標

・農業に従事している人は自然条件を生かしながら生産活動を行っており、消費者のニーズに対応するよう努力や工夫していることが理解できる。

・カードを操作し、自分の米づくりについての論を深めることができる。

4 単元構想のあらまし (全12時間)

米づくりのビデオを見て、米づくりの要件を出し合う。 (2時間)	稲(品種)、自然(土、水、気候)、育て方の3つの要件から調べる。 (3時間)	米づくりの要件を絵や文でまとめ、個々の学習問題をつくる。 (2時間)	おいしい米や安全な米をつくる工夫を調べる。 3時間 (本時2/3)	米づくりと米の供給の問題を調べ、まとめる。 (2時間)
------------------------------------	---	---------------------------------------	---	--------------------------------

5 本時の学習指導

(1) ねらい

(2) 学習指導過程

《学習活動》

1 米づくりについての自分の調べを発表し、本時の課題を確認する。

2 安全な米づくりについて3つの要件から調べる。

(1) 品種、自然(土、水、気候)、育て方の3つの要件でグループで調べ、発表する。

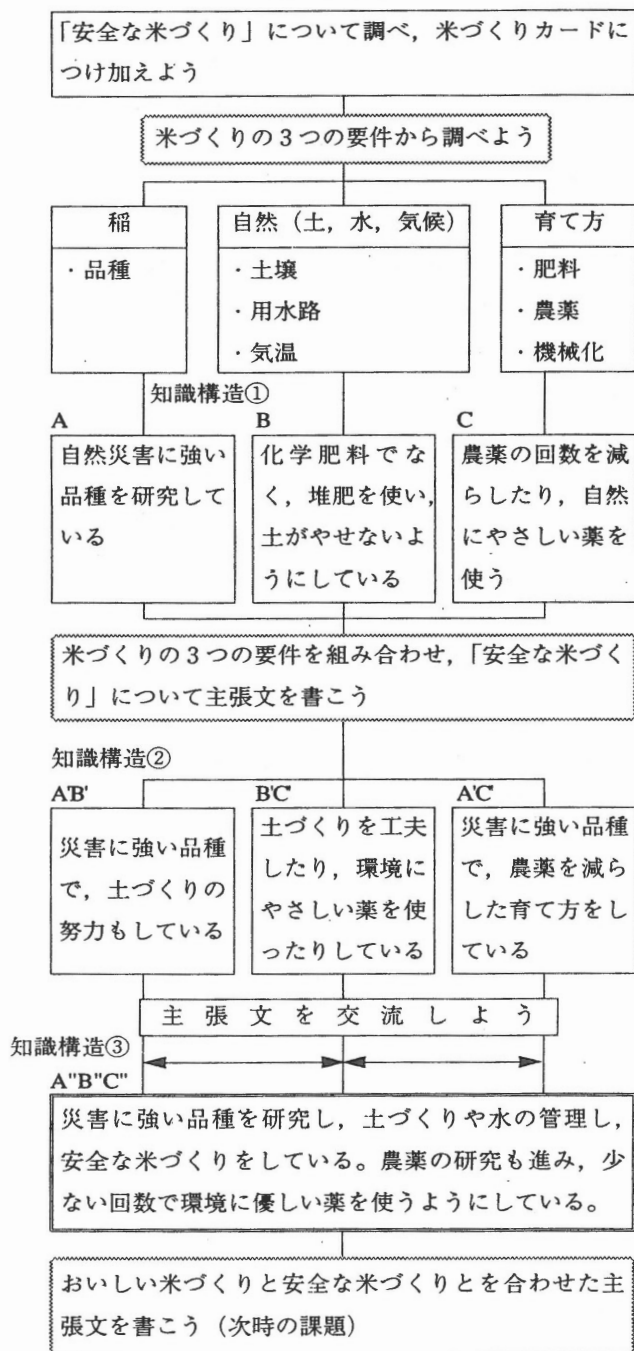
(2) 3つの要件のつながりについて話し合い主張文を書く。

3 主張文を交流し、まとめを米づくりカードに書く。

4 本時の学習の伸びを自己評価し、次時の学習について話し合う。

・農家の人たちは、おいしくて安全な米をつくるために品種改良、土づくりや水の管理、農薬の使用等を工夫していることを、情報コーナーで調べ、自分の考えを高めていくことができる。

《主体的にかかわる認知の過程》



《基礎的な学力》



《教師の支援・援助活動》

○前時までに米づくりにつ
いて米づくりカードに表現
しておき、個々の知識構造
をつかんでおく。そして、
安全な米づくりについて学
習するという見通しがもて
るようになる。

○一人一人が情報に働きか
け、調べていけるよう環境
設定しておき、援助してい
きたい。その際、適切な資
料が見つけにくい子どもに
は、資料の見方や内容につ
いて助言する。

○安全な米づくりについ
て論証していくが、その
因子として稲、自然、育
て方ということで米づく
りカードに書き、仲間分
け等の操作をしながら、
知識構造の変容が図れる
よう援助していきたい。

○稲、自然、育て方等の
因子をつないだ子どもの
論理を尊重し、伸びを賞
賛していきたい。

○おいしくて安全な米を
つくることは、自然や環
境を守ることとつながっ
ていることについて理解
が深まるよう助言し、子
どもの知識構造の変容を
促したい。

